

1. 子供たちがスポーツに出会うきっかけとは

皆さんが何かスポーツを始めたきっかけは何だったろうか？

それは例えば親子でのキャッチボールだったり、兄弟姉妹がやっていたスポーツに興味を持って自分も始めたり、あるいはテレビで見たオリンピックや全国大会のヒーローやヒロインそして名勝負に憧れてなど、そのきっかけはまさにそのスポーツ種目との”運命の出会い”とも言えるような縁があったのではないだろうか。

筆者自身は、近所の友人達との遊びがきっかけで小学校 3~5 年生は野球を、転校先の小学校 6 年生の友人達が漫画『キャプテン翼』（高橋陽一著／集英社発行）の影響を受けてサッカー好きだったことで自分もサッカーに出会い、以後中学~高校 3 年生までサッカーに明け暮れていた。

高校時代脚力強化のために自転車通学を始めたことで自転車の遠乗りの楽しさを知り、大学時代はサイクリングとキャンプに明け暮れ、厄年を迎えた今になってあらためて振り返れば、友人とスポーツの取り持つ縁が、当センターに身を置くことに繋がっていたのである。

どのスポーツとの付き合いにおいても、大きな大会での優勝などにはまったく縁が無く、いずれも「下手の横好き」以外の何物でもないのだが、それぞれのスポーツを通じて仲間たちと汗を流して体を鍛え技術を習得しつつ、勝ち負けやレギュラーポジション争い、怪我やコンプレックスなど心の葛藤も含めて何度も失敗や挫折感を味わいながらも、何がしかの達成感と学びを得て、自分の人間形成に繋がっているように思う。

そのような訳で、筆者にとって高校時代のサッカー部同期や大学時代のサイクリングクラブ同期・先輩・後輩諸兄姉とは、さすがに共にサッカーやサイクリングを楽しむことはほとんど無くなったものの、今でも年に数回顔を合わせて酒を酌み交わし、互いの近況を伝え合い、他愛もない昔話に花を咲かせることができ、これは若かりし日に苦楽を共にして同じ釜の飯を食べたというスポーツの良さのひとつであろう。

読者諸兄姉におかれても、きっとこれまでのさまざまなスポーツ体験から、良き仲間や友人との絆をお持ちのこととお察ししている。

2. 子供たちが自転車と出会うきっかけ

子供たちが自転車に出会うきっかけとしては、両親や祖父母から 2~4 歳頃に三輪車や最近人気の高いストライダーなどのペダル無し自転車、あるいは補助輪付の自転車を買ってもらったり、兄姉や親戚からのお下がりで貰うことが最初だろう。

小学生前後になると、補助輪をつけずに自転車に乗れるようになり、自分の行動範囲が格段に広がるようになる。読者の方々も、ご自分やお子さんが自転車で友達と連れ立って出掛けたり、隣の町や遠くの公園などまで自分の力で出掛けた経験をお持ちだろう。とりわけ 10 代の少年少女達にとって、自転車は自らの意志で行動するための大切な乗り物であろう。

ところで、そもそも一般の方々にとって自転車はどのような目的で乗るものなのだろうか？ 本会では平成 24 年 12 月 13 日(木)~15 日(土)の 3 日間、(社)産業環境管理協会と日本経済新聞社が主催して開催された日本最大級の環境展示会『エコプロダクツ 2012』（主催者ホームページ <http://eco-pro.com/eco2012/>）において、自転車メーカー等 7 企業・団体と共同参画して『自転車エコ学園』というブース出展を行い、会期中 13 日・14 日の両日、谷田貝と筆者は「自転車の科学」と「自転車の歴史」の講師を担当させてもらった。会場ではブース来場者にご協力頂いて自

転車に関するアンケートを実施した。本会事業部がとりまとめた報告書から、アンケートの部分を下記に抜粋引用して、一般の方の自転車の利用方法や問題意識を見てみたい。

※報告書詳細は http://www.bpaj.or.jp/report/24ecopro_houkoku.pdf を参照されたい。

エコプロダクツ2012『自転車エコ学園』概要

●名称：エコプロダクツ2012『自転車エコ(Eco)学園』

●会期：2012年12月13日(木)～15日(土)

●会場：東京ビッグサイト[東4ホール]

●参画企業・団体：

技研製作所、シマノ、パナソニックサイクルテック(株)、ブリヂストンサイクル、ヤマハ発動機、(一財)日本自転車普及協会

●協力：(特非)自転車活用推進研究会、rin project

●出展趣旨：CO₂を排出しない自転車は、環境にやさしいエコな乗り物である。車依存社会からエコな乗り物である自転車を活用した持続可能な社会づくりを提唱する。

しかし、自転車は乗り方のルール・マナーを守らなければ、危険な乗り物になってしまうため、健全な乗り方を広く啓発する必要がある。

これらを一般に分かり易く伝えるため、「学校・教室」スタイルで情報発信を行う。

●エコプロダクツ2012来場者数：

日付	12/13(木)	12/14(金)	12/15(土)	合計
来場者数	60,960人	68,290人	49,251人	178,501人
前回2011年	60,231人	69,444人	51,812人	181,487人



自転車に関するアンケート／結果



電動アシスト自転車試乗会及びアンケート回答者には、豪華賞品の当たる抽選会を実施



【調査概要】

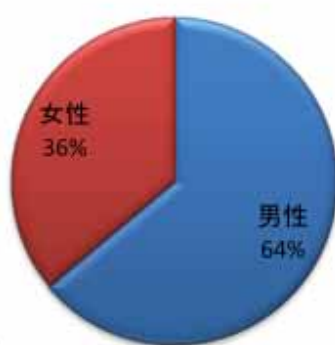
- 調査目的: 自転車利用の目的や自転車走行の実態や意識の把握
- 調査対象: 自転車エコ学園ブース来場者
- 調査期間: 平成24年12月13日(木)～15日(土)
- 調査方法: 来場者にアンケートを渡し、回答者が自ら記入
- 回答者数:

	13日(木)	14日(金)	15日(土)	合計
男性	168名	317名	278名	763名
女性	99名	137名	195名	431名
合計	267名	454名	473名	1,194名

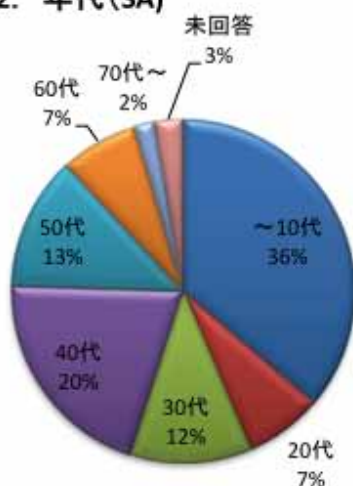
【属性分析】

- ・設問によって回答者数が異なる場合がある。
- ・SA: 選択肢を1つ選ぶ設問
- ・MA: 当てはまる選択肢を複数選ぶ設問

Q1. 性別 (SA)



Q2. 年代 (SA)



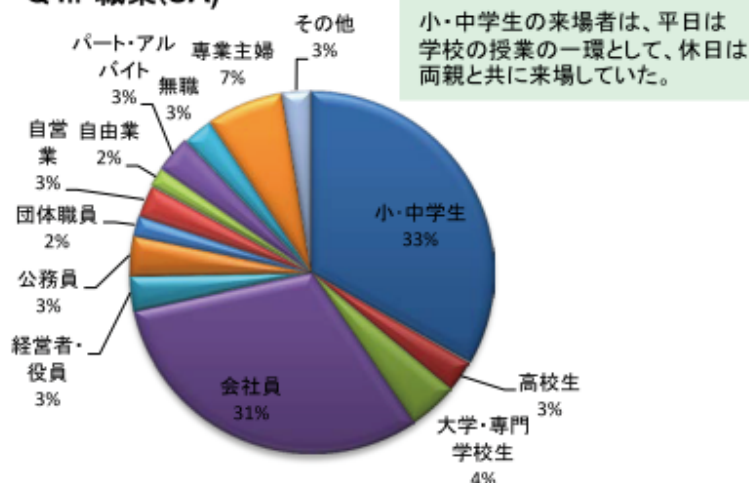
Q3. 居住地 (SA)



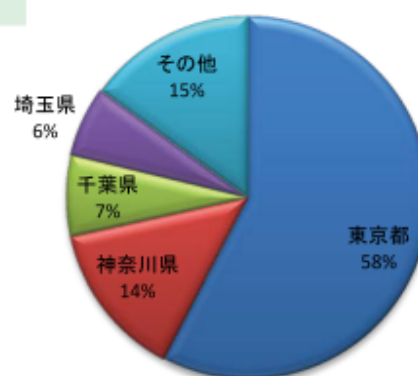
居住地における「その他」については、茨城県や群馬県などが最も多く3割を占めている。
それ以外は、関西が1割、東北0.5割、最も遠方は沖縄県だった。

自転車に関するアンケート／結果

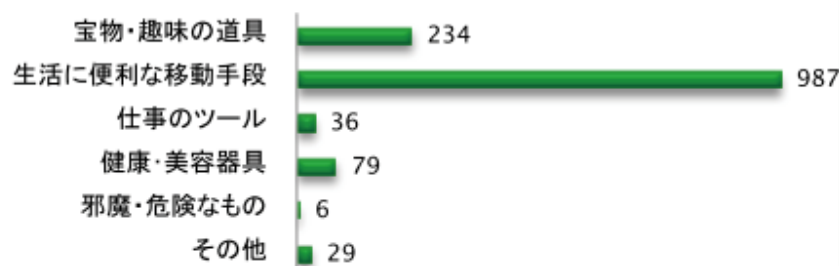
Q4.. 職業(SA)



Q5. 通勤・通学先(SA)



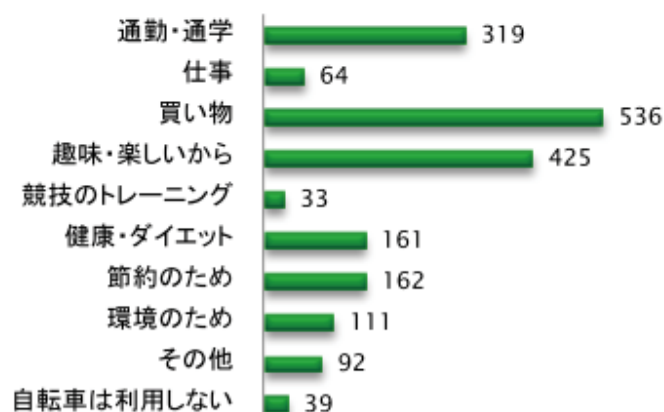
Q6. あなたにとって「自転車」とはなんですか？(MA)



「宝物・趣味の道具」の回答と「健康・美容器具」は、重複回答をしている人が多く、自転車による健康・美容の維持を趣味として楽しむ傾向が伺える。

しかし、やはり一番多いのは、「生活に便利な移動手段」であり、近～中距離の移動は自転車が一番適していることの表れといえる。

Q7. 自転車の利用目的はなんですか？(MA)



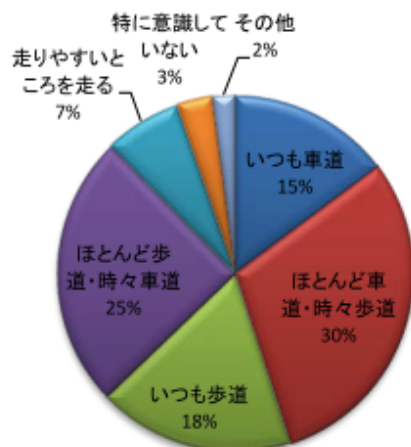
自転車の利用目的では、「買い物」という回答が一番多く、次いで「趣味・楽しいから」という回答であったことから、単に移動手段として便利というだけでなく、自転車で走ることを楽しんでいる人も多くいる。

また、その他の意見では、主に小・中学生が習い事や塾に通うためや、遊びに行くために自転車を利用しているという回答が多かった。

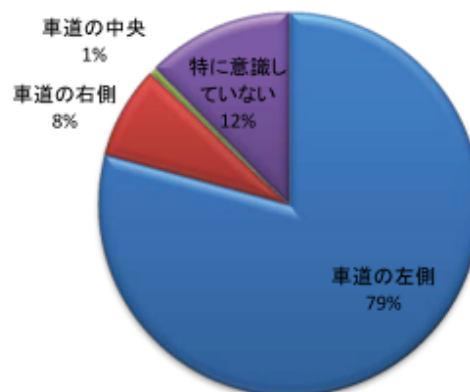
「節約のため」、「環境のため」といった回答は、全体の1割程度にとどまった。

自転車に関するアンケート／結果

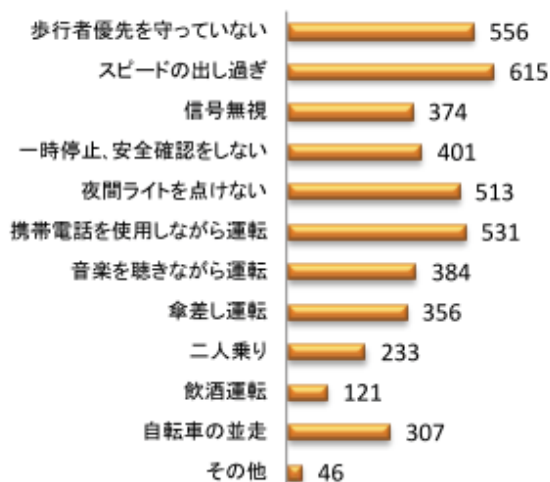
Q8. 歩道のある道路での通行箇所(SA)



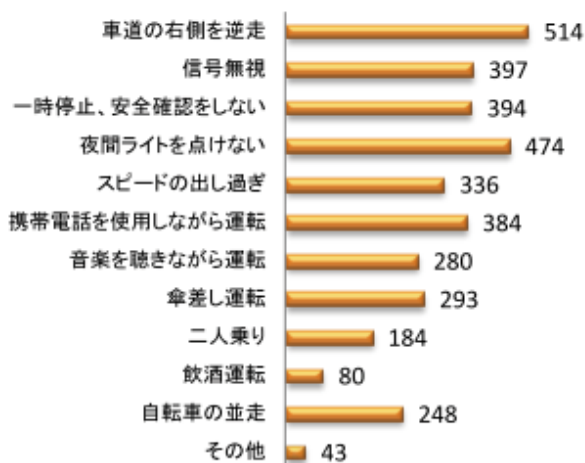
Q10. 車道(歩道のない道路含む)での走行箇所(SA)



Q9. 歩道で自転車に危険を感じた場面はありますか？(MA)



Q11. 車道で自転車に危険を感じた場面はありますか？(MA)



歩道のある道路を自転車で走行する場所では、車道・ほとんど車道と答えた人が45%、歩道・ほとんど歩道が43%でほぼ同率だったことから、「自転車は車道进行」という意識が浸透しているとは言い難い。しかも、歩道上において、自転車が「スピードを出し過ぎている」、「歩行者優先を守っていない」というのが実態として浮かび上がっており、自転車は車両の仲間だという意識の低さが伺える。

また、車道においては、左側を走行すると答えた人が8割だが、右側の回答も少数あった。

しかし、車道で危険を感じた場面として「右側を逆走」が一番多く、逆走が交通ルール違反と認識していない自転車利用者の多さが伺える。また、逆走を危険と感じた人自らが「車道の右側」を走行しているとの回答もあり、自転車が道路のどこを走れば良いのか分かっていない自転車利用者が少なくないと思われる。

歩道・車道を問わず、夜間の無灯火、携帯電話の使用や音楽を聴くなどの“ながら走行”の多さもルール浸透率の低さがよく分かる数字であり、今後も自転車利用のルール・マナーの周知を強化する必要があるといえる。

引用出展： エコプロダクツ 2012『自転車エコ学園』報告書／2013(一財)日本自転車普及協会 発行

アンケート結果から「自転車は生活に便利な移動手段」「買い物」「趣味・楽しいから」「通勤・通学」を目的として乗っておられる方が多いということがよくわかった。

また我が国ではスポーツとしての自転車に楽しむ人々は、野球やサッカーといった競技人口の多いメジャースポーツと比べるとまだまだ少ないが、それでも現在、サイクリングや市民レース・ロングライドやヒルクライム・トライアスロンの大会に出場されたり、健康とトレーニングのために自宅から職場まで自転車通勤される方々が増えているのは、筆者としても嬉しい限りである。

(※Q8~Q11 の項目において問題となっている交通ルール・マナー・走行環境については、別稿で論じたので本稿での詳述は控えるが、皆様の問題意識が大変良くわかり、今後の当センター事業で課題の解決に微力ながらも貢献してまいりたいと考えている。)

3. 子供たちがスポーツとしての自転車に出会うきっかけ

上述のアンケート結果にあるとおり、「生活に便利な移動手段」として老若男女が自転車に乗っておられる訳だが、本稿の本題である”スポーツとしての自転車”に親しむきっかけを提供している事例として、東京都自転車競技連盟(普及委員会)が開催している『子供のための自転車学校』を紹介したい。

当センターでは例年年末になると、自転車専門月刊誌『サイクルスポーツ』(八重洲出版)編集部キャップ・松本敦氏より、同編集部で使用した各メーカーのカタログ等資料で使用済みのものを、資料として寄贈して頂いている。また松本氏が東京都自転車競技連盟普及委員会のメンバーとして『子供のための自転車学校』の運営に携わっておられる。

こうしたご縁から、当センターの事業の参考とさせて頂くため、松本氏にお願いして平成 24 年 7 月 22 日(日)に東京オーヴァル京王閣(京王閣競輪場)で開催された『子供のための自転車学校』を、当センター田中所長・谷田貝学芸員・岸本課員・筆者(及び息子)とで見学させて頂いた。講習会の模様は、下記のホームページを参照されたい。

※東京都自転車競技連盟ホームページ(普及委員会)

<http://www.tokyo-cf.jp/category/spread> ブログ <http://tcf-fukyu.jugem.jp/>

参加者募集 <http://www.tokyo-cf.jp/news/2780.html>

開催結果報告 <http://www.tokyo-cf.jp/spread/2937.html>

この教室の対象者は小学生～高校生となっているが、見学させて頂いた際は小学生から中学生が参加していて、講師やスタッフの方々が用意したプログラムの内容と雰囲気は「安全に楽しく自転車に乗る基本技術と考え方を身につける自転車学校を」(同ブログの標題より)という基本コンセプトがとても良く伝わり、参加している子供たちも熱心で真剣に取り組みつ、明るい笑顔が随所に見られるものであった。

(財)日本自転車競技連盟を始め全国 47 都道府県自転車競技連盟や、(財)日本サイクリング協会を始め 47 都道府県サイクリング協会、そしてスポーツ用自転車専門店(プロショップ)におけるクラブチームなど、サイクルスポーツを愛する方々がさまざまな機会を通じて、「安全に楽しく自転車に乗ること」を広めておられることもあり、少しずつでもさらに自転車ファンの裾野が広がっていくことを願っている。

また去る平成 25 年 2 月 23 日(土)に都内で開催された(公財)日本体育協会『アクティブ・チャイルド・プログラム』講習会に、筆者も昨年取得した同協会公認コーチ資格(自転車競技)の更新講習と自己啓発のために参加させて頂いたが、同じ会場で、東京都自転車競技連盟『子供のための自転車学校』講師を務めておられる同協会公認コーチ・小林氏にお会いした。

自転車学校の講師・スタッフに携わっておられる方々は、松本氏や小林氏を始め本業の合間を縫って貴重な休日を手弁当のボランティアで務めておられる。その情熱と子供たちへの献身ぶりに

心から敬意を表したい。

※参考：(公財)日本体育協会ホームページ『アクティブ・チャイルド・プログラム』

【講習会概要】

http://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data0/coach/event/pdf/practice_h2403.pdf

http://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data0/coach/event/pdf/practice_h2403_2.pdf

【みんなで遊んで元気アップ! アクティブ・チャイルド・プログラム】テキストダウンロード

<http://www.japan-sports.or.jp/publish/tabid/776/Default.aspx>

様々な世代の中でもとりわけ小学生の子供たちは、遊びに行くにしても、野球・サッカー・スイミング・武道といったスポーツであれ、学習塾・書道教室・ピアノといった習い事など何事につけても、自転車に乗って仲間とあるいはひとりで出掛けることが多いと思われるので、科学技術館内における当センターで出会う子供たちに「安全に楽しく自転車に乗ること」を広める役割の一端を担うことができれば幸いである。

4. むすびとして

私どもは自転車の専門図書館・博物館類似施設として、老若男女あらゆる世代の方々に自転車の素晴らしさや楽しさそして有効活用の方法をお伝えするのが役割であると考えているが、現在『科学技術館』という”科学”をテーマとした博物館の2階で3室をお借りして運営していることから、平日は社会科見学の小中学生が大勢立ち寄ってくれている。

ひとりひとりの子供たちとは、本当にわずかな時間の一期一会であるが、この子供たちが10年後・20年後に社会に巣立って活躍し、様々な苦勞を乗り越えながらも、それぞれの価値観に基づいて幸せな人生を歩んでほしいと願っている。

大勢の子供たちを見るにつけ、ひとりひとり個性も人格も能力も持ち味も異なるが、その子本人の意欲や努力に加えて、私達大人がその子に会った教育の機会や指導・接し方をいかに提供するかがとても重要であり、大変に奥が深く難しいものだと日々試行錯誤している。

子育てや教育・人財育成は人類普遍の大きなテーマであり、専門家の方々が日夜研究を進め、子供を持つ親御さんが日々愛情と手間暇を掛けてご尽力されていることと、筆者自身、学芸員としてのみならず1人の父親としてもお察しするところである。

本稿のまとめとして、縁あって筆者が出会い感銘を受けた教育・スポーツ指導・自己啓発に関する考え方・書籍の幾つかをご紹介します。結びとしたい。

・玉川大学『教育理念』「12の教育信条」<http://www.tamagawa.jp/education/idea/>

・汐見稔幸著 『元気になる子育ての本② 3~6歳 能力を伸ばす個性を光らせる』
『元気になる子育ての本③ 小学生 学力を伸ばす生きる力を育てる』
(2011 主婦の友社発行／※科学技術館ミュージアムショップ取扱書籍)

・門田隆将著『甲子園への遺言 伝説の打撃コーチ 高島導宏の生涯』(2005 講談社発行)
44 ページ「プロ野球で、さらに人生そのもので大切な伸びる人の共通点を7つ挙げた。」

1. 素直であること。
2. 好奇心旺盛であること。
3. 忍耐力があり、あきらめないこと。
4. 準備を怠らないこと。

5. 几帳面であること。
6. 気配りができること。
7. 夢を持ち、目標を高く設定することができること。

- ・中竹竜二著『人を育てる期待のかけ方』（2011 ディスカヴァー・トゥエンティワン発行）
※元早稲田大学ラグビー蹴球部監督・(財)日本ラグビーフットボール協会コーチングディレクター
「正しい期待が、人を成長・成功に導く」「V ヴィジョン・S ストーリー・S シナリオ」
「自分への期待をコントロールし、ゴールを達成する」
- ・P.F.ドラッカー著/上田惇生編訳『プロフェッショナルの条件 いかにも成果をあげ、成長するか』（2000 ダイヤモンド社発行）

Part3 自らをマネジメントする（※97~144 ページ）

1 章 私の人生を変えた七つの経験

- ・目標とビジョンを持って行動する ―ヴェルディの教訓
- ・神々が見ている ―フェイディアスの教訓
- ・一つのことに集中する ―記者時代の決心
- ・定期的に検証と反省を行う ―編集長の教訓
- ・新しい仕事及要求するものを考える ―シニアパートナーの教訓
- ・書きとめておく ―イエズス会とカルヴァン派の教訓
- ・何によって知られたいか ―シュンペーターの教訓

2 章 自らの強みを知る

3 章 時間を管理する

4 章 もっとも重要なことに集中せよ

以 上